

# 平城京左京三条一坊十坪の調査

## —第580次

### 1 はじめに

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査区は左京三条一坊十坪のほぼ中軸上に位置する。隣接地の既往の調査（第304次調査）では奈良時代前半期の東西棟掘立柱建物SB7470・SB7480のほか塀や溝を検出しており、今回の調査でもそれらに続く遺構の検出が想定されていた。

調査区は南北7m、東西3mの計21㎡に設定した。調査期間は2016年12月1日から12月9日までである。

### 2 基本層序

表土（厚さ5～10cm）直下には、現代造成土（40～70cm）、耕作土（15～30cm）、床土（10cm前後）が堆積し、さらに土器や瓦、炭を含む遺物包含層（暗褐灰色粘質土、10cm前後）、整地土1（暗灰黄色砂質土、10cm前後）、洪水堆積土（にぶい黄色粗砂、厚さ20～25cm）、整地土2（褐灰色砂質土、5～10cm）、流路埋土（褐灰色粘質土～灰色粗砂、25～40cm）と続き、地山の黒褐色ないしは褐灰色の粘土層となる。地山は調査区北端に向かってやや下がり、西北部で落ち込んでいく。整地土1・2はトレンチ南半で検出し、洪水堆積土は調査区東北部を除き、調査区全面に広がっている。

古代の遺構は、整地土1と整地土2の上面でそれぞれ検出した。標高はそれぞれ約61.6m、約61.4mである。

### 3 検出遺構

主な遺構は、柱穴7基、土坑4基、流路1条である。奈良時代以前（1期）と奈良時代以降に分けられる。奈良時代以降の遺構は2時期に区分でき、2期（整地土2上面）と3期（整地土1上面と洪水堆積土上面）とする。

#### 1期の遺構

**自然流路NR11190** 調査区北部を北西から南東に流れるとみられる流路が検出された。上層の洪水堆積土には土器や瓦の細片が入るのに対し、この流路埋土には瓦や土器が全く含まれず、炭のみを含む状況であることから、奈良時代以前のものと判断される。

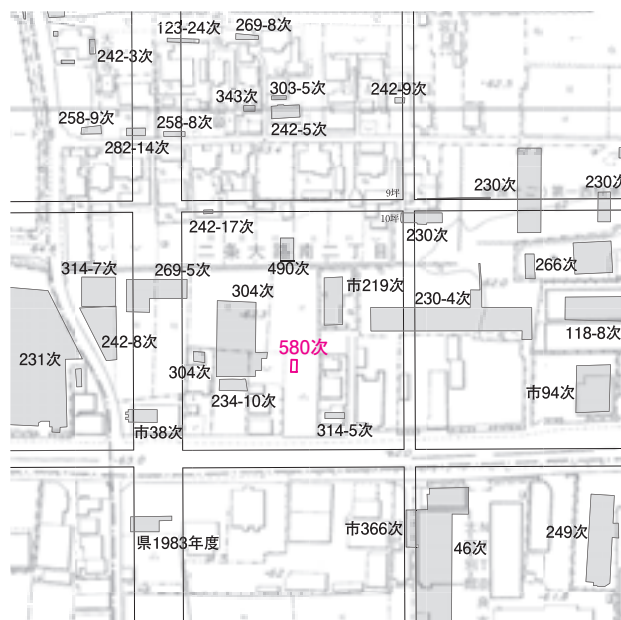


図315 第580次調査区位置図 1：4000



図316 第580次調査区全景

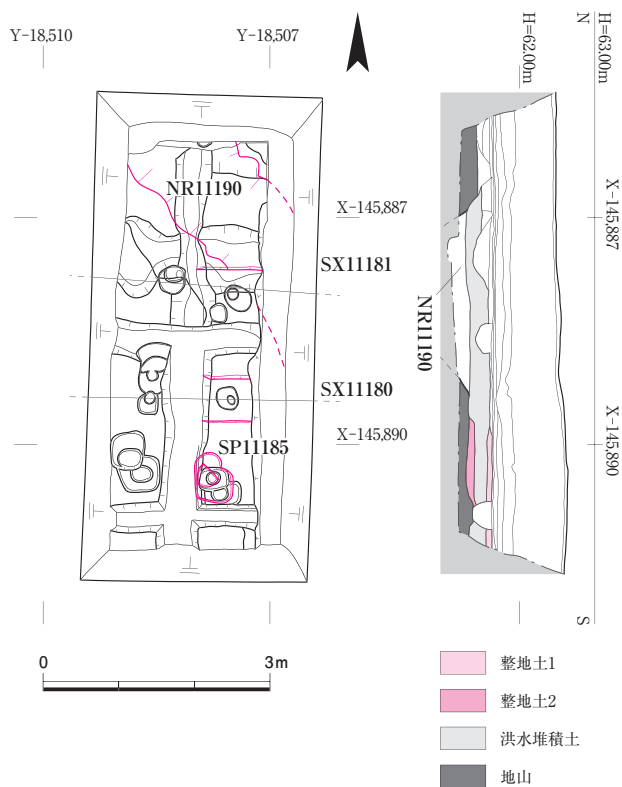


図317 第580次調査遺構図・土層図 1:100



図318 第580次調査出土軒瓦 1:4

表47 第580次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
		6688		Ab	1
軒丸瓦計		0	軒平瓦計		1
	丸瓦		平瓦	凝灰岩	
重量	3.585kg		10.249kg	0.026kg	
点数	40		126	3	

## 2期の遺構

**柱穴SP11185** 整地土2の上面において検出された。柱穴の形態は不整形で南北約67cm、東西約50cm、深さは約8cmである。

## 3期の遺構

柱穴6基と土坑4基を検出した。建物として組み合わせるものは認識できなかった。

**柱穴列SX11180・11181** 調査区中央で検出した2組の柱穴列。いずれも径30～40cm、深さ5～10cmのやや小型の柱穴2基が東西方向に並ぶ。 (岩戸晶子)

## 4 出土遺物

遺物包含層から出土した細片が大半を占め、遺構にともなう遺物は希薄であった。そのため、遺構の年代に利する情報はほとんど得られていない。

**土器・土製品** 整理用コンテナ2箱分の土器が出土した。奈良時代の土師器・須恵器を中心とし、一部弥生土器などを含む。 (丹羽崇史)

**瓦磚類** 整理用コンテナ3箱分の瓦が出土した。大半は奈良時代の丸瓦・平瓦であり、軒瓦は包含層から軒平瓦1点が出土したのみである (図318・表47)。6688Ab型式は第Ⅱ期後半に比定されている。

## 5 まとめ

本調査では平城京左京三条一坊十坪の中心部を調査した。2時期の奈良時代と考えられる遺構面を検出し、それぞれで柱穴および土坑を検出した。途中で洪水堆積を経ながらも繰り返し整地を施し、継続的に土地利用がおこなわれていた様相がうかがえる。

左京三条一坊は七坪が大学寮と推定されているように官衙的性格が強い区画であったことが指摘されている。その一方、十坪では出土した木簡の内容から、個人邸宅や平安京の神泉苑のような池を備えた施設があった可能性も指摘されている。本調査では調査面積が限られていたこともあって、遺構の性格を把握するには至らず、西隣の既調査地で検出された遺構との関係もあきらかにすることはできなかった。十坪の性格のさらなる解明には、今後の周辺の調査に期待したい。 (岩戸)